

児童の漢字学習に及ぼす形声文字教授の役割

佐藤 公代

(教育心理学研究室)

(平成8年4月30日受理)

Role of Teaching the Keisei Character on Character Learning in Child

Kimiyo SATO

問題と目的

今井靖親(1979), 針生悦子(1989), 平井誠也, 清水明子(1993)の研究は, 幼児を対象にした漢字学習の研究である。児童を対象にした研究は, 心理学の分野で見当たらない。漢字教育を本格的に始めるのは小学校に入ってからであり, その時期の子ども達にあった漢字の指導方法について検討を加える必要があるだろう。

現在の学習指導要領によると, 小学校で学習する漢字は, 1,006字で, 漢字指導の弾力化ということで, 学年別漢字配当表にない漢字を使用できるようになっている。

そこで, 国語の嫌いな児童や学習意欲の乏しい児童に, 多くの漢字を効率よく, 楽しく学習させる方法を考える必要があるだろう。

漢字学習の初期段階のものとして, 象形文字がある。他に, 全漢字数の約80%を占めており, 音(音記号)と意味(部首)を表す部分に別れている形声文字がある。

本論では, 形声文字を用いて, 児童に読字学習を行なわせる。

仮説は次の通りである。

- ①読字学習の事前テストにおいて, 小学4年生よりも6年生の方が, 正答点が高いであろう。
- ②形声文字学習を行なった方(実験群)が, 統制群よりも事後テストの正答点が高いであろう。

方 法

- 1) 被験者: 松山市立T小学校, 八幡浜市立M小学校, 総計92名(4年生59名, 6年生33名)
- 2) 実験期日: 1995年10月1日~11月1日
- 3) 手続き: 事前テストを行ない, 4年生には等質に2群に分ける。実験群には, 形声文字

の教授を、統制群には教授しない。事後テストを行なう。6年生には、統制群を作らずに行なう。教授は尾崎純子氏が行なったものである。

4) 条件群

I 群：実験群（形声文字の教授をする）

II 群：統制群（形声文字の教授をしない）

5) テスト内容と得点化

事前テスト、事後テストとも各20問の20点満点である。事前テストでは、4年生までで学習済みの漢字を中心に出题し、事後テストでは、授業で使った漢字を中心に出题している。

6) 授業分析の方法

村上嘉一教授の指導のもとに尾崎純子氏が行なったもので、データベース作成には、R: BASE5000 というコンピューターソフトを使用している。データベース名: JYU, テーブル名: TJYU, 入力様式: FJYU であり、データベースには、時間、発表者名、発表内容、備考が入力されている。

結果と考察

Table 1 に各学年における事前テストの平均点と偏差値を示す。

Table 1 各学年における事前テストの平均点と偏差値

	6年生 I 群	4年生 I 群	4年生 II 群
MEAN	19.55	17.90	18.97
SD	1.33	2.66	2.74
NS	33	29	30

Table 1 から、6年生の方が4年生よりも平均点が高く、5%水準で有意差が認められる。よって、仮説①は支持される。事前テストにおいて、4年生間に有意差は認められない。

Table 2 に各学年における事後テストの平均点と偏差値を示す。

Table 2 各学年における事後テストの平均点と偏差値

	6年生 I 群	4年生 I 群	4年生 II 群
MEAN	18.46	14.66	14.40
SD	1.64	3.34	3.52
NS	33	29	30

Table 2 から、6年生が4年生よりも1%水準で有意に高く、4年生間では教授群の方が統制群よりも平均点が高いが、有意差は認められない。よって、仮説②は6年生には支持されないが、4年生には支持される。

以上から、事前テストは、4年生までで学習済みの漢字を中心に出题しているのので、6年生にとっては易しすぎ、4年生でも分かりやすい熟語を使用して出题しているのので、得点が高くなったのであろう。事後テストは、授業で学習した常用漢字だけでなく、他には応用問題として出题しているのので、4年生にとっても、6年生にとっても難易度が高かったのであろう。また、事後テストを実施したのは、授業から約1週間だったので、授業内で学習したことを忘れてしまったこと、さらに、授業内容が多く、児童が内容を消化できなかった可能性も考えられるだろう。

Table 3 に 6 年生における教師と児童の発表件数を示す。

Table 3 から、190回の発表のうち100回以上が教師の発言で、しゃべりすぎている。発表しているのは19名で、クラスの半分以上が発表していることになるが、ひとりの児童が複数回発表しているの、まんべんなく発表しているとはいえない。児童が指名するので、「この質問はこの人にあてたらいよいよという『暗黙の了解』があるのであろう。

Table 4 に発表者と非発表者及び全体のテストの平均点と標準偏差を示す。

Table 4 から、有意差は認められず、成績の良い児童だけが発表している、悪い児童だけが発表しているなどの片寄りは見られない。

結論と今後の課題

1 回きりの教授・学習で教授の効果を結論づけることはできない。漢字成立の過程にそった長期にわたる授業計画のもとに授業を行なうならば、児童にも分かりやすく、学習効果もあがるであろう。形声文字に焦点をあてるとすれば、常用漢字を学習し始める中学生以上で行えば効果はもっとあがるであろう。

Table 3 6 年生における教師 (尾崎純子氏) と児童の発表件数

番号	件数	番号	件数
①	4	⑫	2
②	2	⑬	3
③	4	⑭	1
④	2	⑮	3
⑤	2	⑯	3
⑥	3	⑰	1
⑦	4	⑱	3
⑧	3	⑲	3
⑨	5	子供	33
⑩	1	先生	105
⑪	3	計	190

Table 4 6 年生における発表者と非発表者及び全体のテストの平均点と標準偏差

		事前テスト	事後テスト
発表者	MEAN	19.36	18.82
	SD	1.74	1.34
	NS	19	19
非発表者	MEAN	19.79	17.86
	SD	1.43	1.88
	NS	14	14
全体	MEAN	19.55	18.56
	SD	1.33	1.64
	NS	33	33

引用文献

- 針生悦子 1989 幼児における漢字とひらがなの読字学習—その指導方法についての検討— 教育心理学研究 37(3), 264-269
- 平井誠也・清水明子 1993 幼児の読字学習における指導法の検討—象形字の学習における絵の呈示効果— 読書科学 37(4), 137-147
- 今井靖親 1979 幼児の読字学習における指導法の検討—片仮名と漢字の学習難易度と絵の呈示効果— 読書科学 23(4), 97-104
- 宮下久夫 1990 漢字が楽しくなる本 ①手引書 太郎次郎社 1-4

付 記

実験者の尾崎純子氏、村上嘉一教授、松山市立高浜小学校、八幡市立松蔭小学校の校長先生および諸先生、児童達(順不同)に、いろいろお世話になりました。心より深く御礼申し上げます。